～もっと山科を知りたくなる～

山科検定

参考資料集

Yamashina Expert Certification

１級合格をねらえ！

地下鉄・市バス応援キャラクター　小野 陵
©京都市交通局 2013-2022

このテキストの特長

特長その１
平成 22 年（山科検定公式テキスト「京都山科東西南北」刊行年）以降の山科の情報を掲載！

特長その２
イラスト、写真が多く分かりやすい！

特長その３
区内の碑(いしぶみ)情報や、山科ゆかりの文学コラムなども掲載！

（令和８年１０月発行）

目次

第１章 山科の沿革---------- 01

第２章 山科区の出来事（平成 22 年５月～）---------- 03

第３章 山科区の「碑（いしぶみ）」---------- 15

―京都市歴史資料館「いしぶみデータベース」より―

付録　元山科図書館長による山科ゆかりの文学シリーズ------ 22

この資料は、山科区の沿革や、公式テキスト『京都山科 東西南北』の発行以降の山科の出来事や、同テキストの時点修正事項等を、山科検定委員会事務局において編集し、取りまとめた参考資料です。

製作 山科検定委員会

第１章　山科区の沿革

◆　山科区のあゆみ

山科区の全景

山科地域にあった安朱村ほか２２村が、明治２２年の町村制 施行ですべて山科村となり、大正１５年１０月には宇治郡山科町となりました。その後、昭和６年４月に宇治郡山科町から京都市東山区に編入され、昭和２６年６月に東山区役所山科支所が開設されました。

昭和３３年以降に始まった名神高速道路の建設で、国道１号線と結合する京都東インターチェンジが設けられ、昭和４２年には国道１号線（五条バイパス）及び外環状線が開通し、交通の要衝として急速に発展。山科地域の急激な人口の増加が始まったことをうけ、昭和５１年１０月、東山区から旧山科地域が山科区として分区され、現在の山科区となりました。

平成９年の地下鉄東西線の開通、平成１０年の山科駅前再開発整備事業の完了などのビッグプロジェクトが成功するとともに、平成１０年の山科地域体育館及び平成 12 年の山科総合福祉会館及びエコランド音羽の杜の建設、平成２０年の阪神高速８号京都線（稲荷山トンネル）開通（平成３１年４月には京都市に移管）により、都市機能が充実し、まちの様相は大きく変貌しつつあります。

令和８年、山科区は東山区から分区して５０年を迎えました。この節目を地域全体で盛り上げようと「山科区誕生５０周年記念事業実行委員会」が発足しました。

◆　山科区のシンボルマーク

平成１８年１０月１日、山科区誕生３０周年を記念し、一般公募のうえ、制定しました。

「水と緑と歴史に彩られたまち山科」をイメージしており、山科の「Ｙ」をモチーフとして、芽生えた双葉から「緑」、取り囲む楕円形で「水」、巡る様子で「歴史」を表現しています。

また、全体を斜めにすることで躍動感を表し、山科区の進歩と発展を願うデザインとなっています。

山科区のシンボルマーク

◆　山科区の人口・世帯数の推移

年（全て 10 月）	人　口（単位：人）			世帯数（単位：世帯）
	総数	男	女	
昭和 55 年	136, 318	66, 572	69, 746	45, 900
昭和 60 年	136, 954	66, 439	70, 515	46, 299
平成 2 年	136, 070	65, 446	70, 624	47, 635
平成 7 年	137, 104	65, 496	71, 608	50, 951
平成 12 年	137, 624	65, 589	72, 035	53, 741
平成 17 年	136, 670	65, 206	71, 464	56, 429
平成 22 年	136, 045	64, 866	71, 179	58, 321
平成 27 年	135, 471	64, 273	71, 198	60, 451
令和 2 年	135, 101	63, 532	71, 569	64, 402
令和 7 年	128, 356	59, 647	68, 709	65, 139

出典：国勢調査

～トピックス～「昔あった建物いろいろ」

①　鐘紡山科工場

大正 11 年から昭和 45 年まで、山科中央公園の近くに大きな敷地をもった鐘紡の工場がありました。現在ここには、山科団地、安祥寺中学校、山科郵便局、山科消防署などが建ち並んでいます。

②　山科駅前の食堂

昭和 34 年製作のコメディ映画「危険旅行」で京津線の線路やこの食堂がロケに使われ話題になりました。中村登監督の作品で、高橋貞二や有馬稲子、トニー谷などが出演。この写真は昭和 28 年、「まるきん食堂」の開店時のものです。昭和 41 年頃まで山科駅前にありました。

③　山科の映画館

山科映画劇場は昭和２年、山科京極付近に開館しました。当時は、鐘紡の女工さんもよく観に行ったそうです。この建物は昭和 50 年頃までありました。写真は東海道線電化を祝うため義士行列が出されて、映画劇場前で記念撮影をしたときのものです。この義士行列は現在の義士まつりのルーツになりました。

④　山科観光ホテル

昭和 43 年頃から昭和 45 年頃まで、現在の音羽病院がある場所に、山科観光ホテルが開業していました。昭和 55 年に同病院となり、現在に至っています。

出典：写真集モノクロームヤマシナ(平成 18 年３月発行)

第２章　山科区の出来事（平成２２年５月～）

公式テキスト『京都山科 東西南北』刊行年（平成２２年）以降の山科区の出来事をまとめています。

◆　ＪＲ山科駅

ＪＲ山科駅は大正１０年に東海道本線（琵琶湖線）大津～京都間が現在のルートに変更された際に現在の場所に移転・開業しました。令和３年、開業１００周年を記念し、駅構内でのパネル展示と合わせて、山科三条街道商店会と山科商店会を中心とした“もてなすくん実行委員会”により「もてなすくんクイズラリー」が実施されました。その他にも「山科の魅力発見ガイドツアー」など様々なイベントが実施され、山科駅を中心に賑わいをみせました。

また、山科は、ＪＲ東海道線・湖西線の他、京都市営地下鉄東西線や京阪京津線の３線が交わる交通の要衝で、共通の利便性も高く、「京の東の玄関口」ともいわれています。令和７年度からはＪＲ山科駅の改良工事が実施されており、令和１１年度には特急「はるか」が京都駅から山科駅まで延伸される予定です。これにより京都の中心部や国際空港へのアクセスがより快適になります。

◆　ラクト山科

山科駅前地区は、JR 東海道線、京阪電鉄京津線の駅前に隣接するとともに、バス路線が集中し、幹線道路が走るという交通の要衝であり、古くから多くの商店街が立地し、発展してきました。しかし、高度経済成長期に山科区全体が急激な都市化が進んだにもかかわらず、山科駅前地区については、商店街の近代化の遅れが目立ち、商業活動の停滞感が生じていました。

そうした状況を踏まえて、道路、地下道、駅前広場などの公共施設の整備、住宅やホテル、商業施設などを配置することで新しいまちづくりを進めるため山科駅前再開発が進み、平成１０年に「ラクト山科」が誕生しました。

現在、ラクト A 棟には、ラクト山科誕生２０周年の平成３０年に開業した「京都山科ホテル山楽」、ラクト B 棟には関西最大規模となる「無印良品 京都山科」をはじめ、令和５年７月には「カルディコーヒーファームラクト山科ショッピングセンター店」が開業されるなど、多数の商業施設の参入により、日々賑わいを見せています。

令和６年１０月には、B 棟に京都市内で ３店舗目のロフトが出店し、「山科ロフト」としてオープンしました。

現在、山科図書館のラクト山科への移転・充実、そして京都市東部地域初となる大型の子どもの屋内遊び場の併設が検討されており、令和８年３月には、本施設の整備・運営の方向性をまとめた「山科駅前遊びと学びの拠点複合施設（仮称）整備・運営構想」が策定されました。

ラクトＡ棟
（左奥の建物はラクトＢ棟）

◀整備前の山科駅前の様子（平成４年 12 月 31 日、山科駅前にあった公設市場の最終営業日、駅前通公設市場北側入り口から、西方の和楽園商店街を写しています。駅前通公設市場の跡地には、ラクトＢが建設されました。）

◆　都市計画の見直し

京都市は、将来にわたって安心安全で暮らしやすく、京都の都市特性を踏まえた持続可能な都市構造の実現を図るため、令和３年９月に都市計画の見直しを行い、山科区においても、外環状線沿線道路において、歩道状空地等の設置により建物の高さ制限が無制限になるなど、より自由度の高い建物の建築が可能となりました。

◆　京都市営地下鉄東西線

平成９年１０月に「二条～醍醐間」が開業、山科区から市中心部へのアクセスが飛躍的に向上しました。

平成１６年１１月には醍醐駅から六地蔵駅まで、平成２０年１月には二条駅から太秦天神川駅までが延伸開通しました。

なお、山科駅～御陵駅間の施工に当たり採用された「４本超近接回転移行シールドトンネル」は、世界初の事例として、平成７年度の「土木学会技術賞」を受賞しました。

令和７年度には、「地下鉄に乗るっ」新作ポスターとして、地下鉄・市バス応援キャラクターの一人が初夏の山科区の毘沙門堂門跡を訪れているビジュアルが登場しました。

◆　地下鉄・市バス応援キャラクター　山科ゆかりの「小野 ミサ」「小野 陵」

平成２３年、京都市地下鉄・京都市バス応援キャラクターとして「小野 ミサ」が誕生しました。名前は、地下鉄東西線小野駅に由来しており、既に登場していた「太秦 萌」の幼馴染という設定です。

また、平成２８年には、「小野 ミサ」の兄という設定で、新たなキャラクター「小野 陵」が誕生しました。

＜小野ミサ プロフィール＞

身長：154cm　体重：46kg

京都市内の高校に地下鉄を使って通う高校２年生。太秦萌の幼なじみで、あるアニメの影響で軽音部に所属し、ギターを担当。二人兄妹の妹で、音楽と植物が好きなちょっとクールな 女の子。育てている植物はハイ苔で作った苔玉。運動は苦手なため、ついついエスカレーターを使っちゃう派です。

＜小野陵 プロフィール＞

身長：173cm　体重：60kg

小野ミサの兄。烏丸ミユと同じ大学に通っており、学部は違うが同級生。デザイン系の勉強をしており、デジタルガジェットに精通しているギークでもある。妹のミサには基本そっけなく対応するが、ついつい甘やかす一面も。無駄なことを嫌う合理主義で、定刻どおりに来る地下鉄が好き。

©京都市交通局

◆　京都市バスの運行

災害等により京都市営地下鉄東西線が不通となった場合の代替ルート確保と新型コロナウイルス感染症拡大の影響による京阪バスの減便を補うことを目的とし、令和３年１２月１日から、河原町三条（京都市役所前駅）から五条通を経由し、国道東野（東野駅）までを結ぶ、京都市バス特８０号系統が運行を開始しました。

◆　京阪電鉄京津線

平成２４年、山科区の御陵駅と大津市の浜大津駅を結ぶ「京阪電鉄京津線」の開業１００周年を記念し、平成９年の京都市営地下鉄東西線乗り入れに伴い廃線となった山科区内の駅（日ノ岡駅、九条山駅）など、浜大津駅から三条駅までの１２キロを歩いて辿る「記念ウォーク」が開催されました。

◆　鏡山循環系統バス

鏡山循環系統バス

平成２７年３月、鏡山地域と山科駅を循環するバスが 19 年ぶりに復活しました。

平成８年の休止後、“地域の足”として、住民による復活を求める活動が高まり、平成２５年３月から実証運転が実施されました。現在は、「鏡山循環系統バス」として、平成２７年３月から本格運行が行われています。

バスの復活以降も、１便あたり２０人の利用数を継続させるため、「お試し無料乗車券」付広報ビラの作成やチラシの全戸配布、地域の催し会場での宣伝などの啓発活動を継続しました。その努力が実を結び、平成２９年１０月には、１日２便から１便増便されました。

令和２年１２月には、事業の継続性や地域住民が一丸となってバス利用促進を通じたコミュニティ活性化に取り組んでいることが評価され、鏡山学区自治連合会、京阪バス株式会社、山科区役所が合同で、国内のモビリティ・マネジメント（MM）についての様々な取組に貢献した個人・団体を表彰する JCOMM マネジメント賞を受賞しました。

さらに令和６年１０月には、平日６便・土日４便に増便されています。

◆　小金塚地域循環バス

小金塚地域循環バス

平成３１年３月に小金塚地域を循環する「小金塚地域循環バス」が京阪バス株式会社により、概ね２年間の社会実験として新たに運行を開始しました。

小金塚地域は、なだらかな起伏や小山の続く丘陵地帯を開発して造られたまちです。地域では、小金塚自治連合会が中心となり、バス運行へ向けた取組を平成１７年から進めてきました。令和４年３月に京阪バス株式会社の実証運行は終了し、令和４年４月１日からは地域住民によるボランティアバスが運行されています。

◆　meetus（ミータス）山科-醍醐

令和６年３月、山科・醍醐地域の魅力やポテンシャルを最大限活かし、あらゆる世代がワクワクするような山科・醍醐を目指し、京都市で「meetus（ミータス）山科-醍醐」プロジェクトとして、全庁体制の推進本部が設置されました。外環状線沿道エリアを中心に、地域資源を活かした活性化を地域の方々と共に進め、移住定住の促進、賑わいや利便性の向上、公園・公有地の利活用など、活性化に向けた取組を推進しています。

令和７年３月には、今後のまちづくりの方向性や具体策を「meetus 山科-醍醐 みんなで創るまちＰＬＡＮ」としてとりまとめられました。多様な主体との共創のもと、多様な人々が住み、学び、つながることのできる「文化・教育のまち“山科・醍醐”」を目指して、まちづくりが進められています。

令和７年度には、東野公園を様々な活動が集まる魅力的な公園にするため、遊具の更新・新設や見通しの良い明るい公園を目指した樹木の伐採・剪定が実施されました。

また、令和８年３月には、「山科駅前遊びと学びの拠点複合施設（仮称）整備・運営構想」が策定されました。（Ｐ３参照）

◆　伏見城の採石場跡

平成２５年６月、山科区大塚葭ヶ谷の山中で、豊臣秀吉や徳川家康の居城であった伏見城の石垣の普請に使われた採石場跡が発見されました。

織豊政権期～江戸時代前期の儒医小瀬甫庵が書いた秀吉の伝記『甫庵太閤記』に、伏見城を築く際に、山科の山中で採石したとの記述があり、発見された遺構は文献史料を裏付けるものと考えられています。

採石場跡からは、石を効率的に割るための矢穴があけられた花崗岩２４個が点在していたことが明らかになり、その内、複数個の石には、当該期の大名が採石者を示すために彫った記号「一に〇」や「四つ目」という刻印が残されています。

◆　山科本願寺跡史跡公園

平成２４年からの新たな発掘調査により、山科本願寺跡の中心部分である御本寺部分から石風呂を伴う建物跡等が確認されたことを受け、平成２７年１２月、「山科本願寺跡及び南殿跡」として国史跡の追加指定が行われました。その後、公園として整備が進められ、令和３年に整備が完了し、令和３年４月１８日に「山科本願寺跡史跡公園」として開設しました。

※　山科本願寺については、公式テキスト『京都山科 東西南北』p38～p40 を参照

◆　琵琶湖疏水

明治期の先人たちが築き上げた貴重な産業遺産である琵琶湖疏水。明治２３年の竣工以来、旅客・貨物とも大いに利用された通船は、交通網の発達に伴い昭和２６年にその姿を消しました。

公民の連携により立ち上げた「琵琶湖疏水船下り実行委員会」では、平成２７年春に試行事業を実現させて以来、５回の試行事業を実施しました。その後、実行委員会から発展した「琵琶湖疏水沿線魅力創造協議会」により、平成３０年３月から「めいじ号」、「へいせい号」の２艘を使用して６７年振りに通船の本格運航が復活し、山科を経由して蹴上－大津（三井寺）間を「びわ湖疏水船」が航行しています。令和元年９月には３艘目「れいわ号」が、また令和５年９月には４艘目「へいわ号」がお披露目され、現在は３船（４艘をローテーションで使用）で春と秋の期間限定で運航しています。また、令和５年３月には、航路の大津側の起点を琵琶湖・大津港に延伸する「航路延伸プロジェクト」を進めるため、クラウドファンディングが実施され、令和６年３月に航路として延伸された便が追加されました。

令和７年８月、琵琶湖疏水の諸施設２４箇所が「重要文化財」に、そのうち５箇所が「国宝」に指定されました。山科区内の施設では、第一隧道、第二隧道、第三隧道が「国宝」となりました。

第二隧道（東口）

第二隧道（西口）

第三隧道（東口）

※「山科疏水」については、公式テキスト『京都山科 東西南北』p6 を参照

◆　**東山自然緑地における花の名所づくり**

山科区に位置する琵琶湖疏水沿いに整備された「東山自然緑地」は、平成２８年度から『四季の花木を楽しめる京都の新しい花の名所』とするため再整備が進められ、令和３年１０月に整備が完了しました。これは平成２９年９月に市民のみなさんの意見を踏まえて策定された「東山自然緑地再整備計画」に沿って実施されたもので、琵琶湖疏水（山科疏水）沿いの緑道や広場、トイレなども新しくなり、四季の花木を楽しめる過ごしやすい環境に生まれ変わりました。

◆　**京都市・大津市間の災害時における避難所の相互利用に関する協定**

平成２６年４月、京都市と大津市は、「京都市・大津市間の災害時における避難所の相互利用に関する協定」を締結しました。

協定の締結に伴い、山科区音羽学区と大津市藤尾学区の住民が災害時に互いの避難所を利用できるようになったほか、京都市と大津市は、必要に応じて両市の職員を相手方の避難所に配置することができるようになりました。

なお、府県境を越えての避難所の相互利用に関する協定の締結は、全国で初めてです。

◆　**京都市指定・登録文化財指定**

令和２年３月３１日に徳林庵「山科地蔵堂」及び「拝所」が、令和４年３月３１日には毘沙門堂「霊殿」が新たに京都市指定・登録文化財指定されました。毘沙門堂は本堂などと合わせて１０棟目の登録となります。

＜参考＞山科区の京都市指定・登録文化財（建造物）一覧

名称及び員数		告示日
山科神社本殿（１棟）	山科神社本殿	昭和５９年６月１日
勧修寺（２棟）	宸殿	昭和６０年６月１日
	本堂	
毘沙門堂（10 棟）	本堂	昭和６０年６月１日
	唐門	
	仁王門	
	鐘楼	
	宸殿	
	使者の間	
	玄関	
	霊殿	令和４年３月３１日
	勅使門	昭和６０年６月１日
	薬医門	
八幡宮本殿（１棟）	八幡宮本殿	昭和６２年５月１日
徳林庵　山科地蔵堂及び拝所（２棟）	山科地蔵堂	令和２年３月３１日
	拝所	
日向大神宮（２棟）	内宮本殿	昭和６２年５月１日
	外宮本殿	

◆　**隨心院に襖絵「極彩色　梅匂小町絵図」**

平成２１年、隨心院表書院「能の間」に４面からなる襖絵「極彩色 梅匂小町絵図」が奉納されました。若手の２人組のアーティスト「だるま商店」によって作成された作品で、小野小町の生涯がＣＧを使用してはねず色を基調に鮮やかな色彩で描かれています。当初は撮影禁止でしたが、多くの要望があり撮影可能になりました。近年では人気のフォトスポットとして人気を集めています。

極彩色　梅匂小町絵図

◆　**天皇陛下御即位記念「京都山科非公開文化財等の特別公開」**

天皇陛下御即位を記念し、令和元年１１月～１２月に、それまで非公開であった安祥寺、勧修寺、隨心院、毘沙門堂、本圀寺の皇室ゆかりの寺院と連携し、京都山科を代表する５寺院すべてにおいて、通常は拝観できない文化財が、一斉に特別公開されました。

安祥寺「木造十一面観音立像」

◆　**安祥寺「五智如来坐像」**

長らく国の重要文化財だった安祥寺「五智如来坐像」は平成３１年３月、国の文化審議会にて国宝指定の答申がなされ、同年７月に国宝に指定されました。

五智如来は、大日如来に備わる５つの智恵を５体の仏像で表したものです。今回国宝に指定された五智如来坐像は、安祥寺上寺の礼仏堂の本尊として、西暦８５１年～８５９年頃に造られました。国内最古、そして唯一の平安初期の五智如来坐像としてその歴史的価値が評価されています。

現在は京都国立博物館に寄託され、優れた環境の下、保管・展示がなされています。

市民しんぶん山科区版
令和元年 7 月 15 日号

◆　**十禅寺縁起絵巻**

令和７年３月に、十禅寺縁起絵巻が京都市有形文化財に指定されました。十禅寺の創始から江戸時代前半の復興までを描いた絵巻で、約１０メートルもの長さがあります。長らく京都国立博物館に保管されていましたが、指定のための調査で、十禅寺に眠っていた下絵が再発見され、下絵も合わせて附として指定されました。この絵巻は、令和７年９月から１１月の間、京都文化博物館で　開催された総合展示　「未来へのおくりもの 京都府×京都市 指定文化財」で展示されました。

※「十禅寺」については公式テキスト『京都山科 東西南北』p10 を参照

市民しんぶん山科区版
令和 7 年 7 月 15 日号

◆　**一般社団法人山科経済同友会**

一般社団法人山科経済同友会結成５０年記念事業として山科中央公園への植樹や記念碑の設置、京都橘大学協力のもと『山科の歴史と現代』の刊行・配布が行われました。

令和６年には、創立５５周年を記念し、初著『武士の家計簿』が映画化され大ヒットした国際日本文化研究センターの磯田道史氏を招板記念講演会が実施されました。

山科の歴史と現代

◆　**第３１回義士親善友好都市交流会議　忠臣蔵サミット in 山科**

平成元年、兵庫県赤穂市の呼びかけで、「忠臣蔵ゆかりの地等」の所在する全国の自治体が一堂に集まり、忠臣蔵を活用したまちづくり等の事例を発信すること等を目的に、「義士親善友好都市交流会議（忠臣蔵サミット）」が創設されました（山科区は平成２９年度に加盟）。現在、同サミットには全国３２の自治体が名を連ねており、毎年１回加盟自治体の持ち回りにより、「忠臣蔵サミット」が開催されています。

令和元年１０月２５日に、山科区において第３１回義士親善友好都市交流会議（忠臣蔵サミット in 山科）が開催され、当日は、式典や参加自治体との交流会議、イベント、お茶席、山科の特産品の販売・展示及び山科義士まつりの展示会等が行われました。

◆　**清水焼団地キャラクター「きよまろ」**

平成２２年、東山区の五条坂等から移転し創設された「清水焼団地」の茶碗をモチーフにしたキャラクター「きよまろ」が誕生しました。

「きよまろ」は、「もてなすくん」(※) とともに、山科区制４０周年記念事業応援大使としても活躍しました。

※山科三条街道商店会のマスコットキャラクター「もてなすくん」については公式テキスト『京都山科　東西南北』p13 を参照

きよまろ

◆　**勧修寺ぶどうイメージキャラクター「カンちゃん」**

平成２９年４月、山科の特産品の一つである勧修寺ぶどうのＰＲキャラクター「カンちゃん」が誕生しました。ピンクのうさぎの頭がぶどうになっているユニークなキャラクターで、勧修寺樹園地組合が製作しました。

カンちゃん

◆　**坂上田村麻呂の化身　山科の新ヒーロー「マーロウ」**

平成２９年７月に、山科にゆかりのある征夷大将軍、坂上田村麻呂をモチーフに、「勧修おやじの会」が新ヒーロー「マーロウ」を制作しました。「勧修おやじの会」は坂上田村麻呂公園(勧修寺東栗栖野町)の管理を平成２５年から行っています。マーロウは「いじめっ子の心の中にある悪」を退治し、山科の活性化、子育て環境の向上を目指して活動しています。

令和７年度、「山科まちづくりチャレンジ応援事業」の採択事業としてマーロウがバージョンアップし、勧修夏まつりやふれあい“やましな”区民まつり等で登場。山科を盛り上げています。

マーロウ

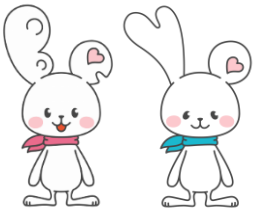
◆　**山科図書館開館キャラクター「ぶっくろう」**

平成２４年、山科図書館が開館６０周年を迎え、マスコットキャラクター「ぶっくろう」が誕生しました。令和４年には、開館７０周年記念事業として山科の歴史を伝える記念講演会や７０周年記念ブックカバーのプレゼントが行われました。

ぶっくろう

◆　**山科区社会福祉協議会キャラクター「ビラビ」と「ボラビ」**

山科区社会福祉協議会は平成６年に設立されて以降、山科区の地域福祉の発展のため、関係者とのネットワークを築きながら、住民が主人公となった地域福祉活動を進めています。令和２年に誕生したマスコットキャラクター「ビラビ」と「ボラビ」の耳のハートは、山科区の形を模しています。



ビラビ　　ボラビ

◆　**安朱小学校学校運営協議会**

安朱小学校学校運営協議会は「安朱子どもコンソーシアム」と共に活動を推進し、子どもたちの地域社会への参画能力を育む取組が評価され、令和５年２月３日「コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的推進」に係る文部科学大臣表彰を受賞しました。

◆　**山科中学校**

山科区初の新制中学校である山科中学校は、昭和２２年４月に学制改革により創設、山階・勧修・鏡山・音羽・醍醐の５小学校を校区として、山階小学校内に併設され、昭和２４年４月に現在地（当時は東山区山科東野八反畑町）に移転しました。

◆　**山階南小学校**

令和４年、山階南小学校が創立５０周年を迎えました。山階南小学校では１９８０年４月～１９８６年３月生まれの卒業生に呼びかけ、タイムカプセルの開封式が行われ、在校生は１０年後の自分に手紙を届ける「タイムカプセル郵便」に手紙を投函しました。

◆　**安祥寺中学校**

令和４年、創立５０周年を迎えた安祥寺中学校では、全校生徒から案を募集し、記念キャラクター「アンショウオ」と記念応援ソングを作成しました。

記念式典では、作詞・作曲を手掛けていただいた元新選組リアンの関義哉さんと全校生徒で記念応援ソング「step by step」を披露しました。

◆　**山階小学校・勧修小学校**

令和４年、山階小学校と勧修小学校が創立１５０周年を迎えました。両校は現在の小学校の母体となった小学校でもあり、山科区の歴史を共に歩んできた学校です。各校では記念式典が盛大に行われました。

＜山階小学校＞

山階小学校では児童による折り鶴アートの作成をはじめ、式典では、女性会のおどり披露や子ども達からの詩の披露などが華やかに執り行われました。また、創立１５０周年を記念して設置した石碑の隣には、石でできたゾウのベンチも設置されました。

＜勧修小学校＞

創立１５０周年を記念して、狂言の鑑賞会をはじめ、様々な催しが執り行われました。また１９３４年９月２１日に京阪神に甚大な被害をもたらした室戸台風襲来時、講堂や校舎が壊れながらも７００人の児童が無事だった歴史を記録する石碑も建てられ、当時のことを知る地域の方が講演を行いました。

◆　百々小学校

令和５年度、百々小学校が創立５０周年を迎えました。令和５年１１月１１日に体育館で行われた記念式典では、京都市教育長からのお祝いメッセージや歴代校長先生からの激励のメッセージが紹介され、式典の後、山科中学校吹奏楽部の皆さんによる記念コンサートが行われました。創立５０周年を記念し、創立５０周年記念実行委員会により、正門の新調、東門小門の設置、電子錠の設置などが行われました。

◆ 医療法人社団洛和会

令和６年３月、山科区役所と医療法人社団洛和会は、地域防災、まちづくり、健康づくりなどに関する事業、取組等の連携及び協働により、山科地域の一層の活性化を図ることを目的とした包括連携協定を締結しました。

らくの助

◆　京都薬科大学

京都薬科大学は明治１７年に京都私立独逸学校として誕生し、その後、私立京都薬学校、京都薬学専門学校となり、昭和７年に山科に移転しました。令和４年、移転９０周年を記念して京都薬科大学の歴史を振り返る講演会や写真展などが行われると同時に、愛学躬行歴史資料室の一般公開も実施されました。令和６年には、創立１４０周年を迎え、記念ロゴマークがリリースされました。また、令和７年には、附属施設である薬用植物園御陵園が開設１００周年を迎え、５年ぶりに公開されました。

◆　京都橘大学

京都橘大学は、現在のキャンパスがある山科の地（当時は東山区）に「橘女子大学」として開学しました。昭和６３年には「京都橘女子大学」へと名称を変更し、時代が求める女性の教養や専門教育を授ける場として、学部・学科を拡充していきました。

平成１７年には、男女共学化し、大学名を現在の「京都橘大学」へと改称。共学化以降、それまでの人文社会系の学びに加え、看護や理学療法をはじめとする医療・健康系の学部を次々と新設しました。

近年では、令和３年に工学部・経済学部・経営学部を開設するなど文理の枠を超えた改組を進めるとともに、令和８年４月には、最新のデジタルメディア学部や工学部ロボティクス学科、健康科学部臨床工学科などの新設するなど、現在では１０学部１８学科を擁する大規模な総合大学となっています。

◆　京都橘大学サテライト・ラボラトリー

京都橘大学は平成２９年に大学開学５０周年を迎えた京都橘大学は、同年、山科駅前商店街の一角に京都橘大学サテライト・ラボラトリー『たちラボ山科』を開設。『たちラボ山科』は、京都橘大学が立地する山科区との一層の連携を目指し設置され、商店街の活性化や観光振興など地域課題を探る学生の拠点となっています。

◆　京都橘大学アカデミックテラス

令和８年４月、学内で最も広い延床面積を誇る新棟「ACADEMIC TERRACE（アカデミックテラス）」が竣工。AI 時代や医療・工学の連携（医工連携）を牽引する、地域・社会に開かれた最先端のオープンイノベーション拠点となっています。

◆ 「やましな駅前陶灯路」、京都橘大学「七夕陶灯路」

京都の伝統産業である清水焼にロウソクを浮かべて灯りをともし、それらを並べて幻想的な空間を演出する灯りのイベント、「やましな駅前陶灯路」(やましな駅前陶灯路実行委員会主催)、京都橘大学「七夕陶灯路」は、平成２９年１０月と平成３０年７月に、それぞれ１０周年を迎えました。
※「やましな駅前陶灯路」は現在休止中

◆ 山科 SWEETS FES(山科スイーツフェス)

令和５年４月２日に本願寺山科別院で、山科のスイーツとパンが大集合する「山科 SWEETS FES」が開催されました。山科のスイーツ、パン、キッチンカー、ワークショップ、音楽ステージなどが一堂に介し、スイーツ＆パンだけではなく山科の魅力を一度に楽しめるマルシェに大勢の方が来場しました。その後、令和７年度まで毎年春に継続して実施されていましたが、令和８年度からは「山科×スイーツ SWEETS EXPO」としてリニューアルが予定されています。

◆ ふれあい“やましな”区民まつり

昭和６０年に「ちびっこまつり」としてスタートし、平成３年に「ふれあいまつり」に改称され、現在に至ります。区民と行政との協働による事業として、コロナ禍を除いて毎年開催されており、各種団体によるブース出展や模擬店コーナーなどが実施されます。平成 30 年度から「健康フェスタ」、また、令和５年度からは、防災関係機関が防災に関連するブースを出展する「防災フェア」も同時に開催されています。

◆ 地域ふれあい広場（六兵ヱ池公園）

令和５年４月２９日、コロナ禍明けを契機に、六兵ヱ池公園において、鏡山学区が学区を超えた地域の交流促進と活性化のため、地域の子ども達など、みんながふれあえるイベント「第１回地域ふれあい広場」が開催されました。飲食ブースの出店や地元の子どもたちによるパフォーマンス、行政ブースも開設され、地域の交流を深める大規模なイベントとなりました。また、六兵ヱ池公園においては、令和６年度から京都市の「Park-UP 事業」を活用し、「公園から広がるイキイキ地域づくり」をテーマとして新しいスタイルの地域コミュニティづくりを目指した取組が進められています。

◆ KYOPO（キョポ） -Kyoto Pottery Expo

昭和５０年の第１回開催以来、清水焼団地を舞台に、京焼・清水焼の魅力を国内外に発信してきた京都最大級の陶器市「清水焼の郷まつり」。令和８年、第５０回という節目の年を迎えるにあたり、イベント名称を「KYOPO（キョポ） -Kyoto Pottery Expo-」とリニューアルされました。毎年１０月第３金曜から日曜の３日間開催され、窯元や作家、卸問屋が一同に集まり、器の販売だけでなく、グルメブースやワークショップなどもあり、１日楽しめるイベントです。また、年に一度のイベント実施だけでなく、通年の情報発信や技術継承、海外市場開拓を並行して進め、清水焼の持続的な発展と伝統産業全体の新たなモデルの構築を目指されています。

◆ 山科まちづくりチャレンジ応援事業

令和６年４月から、山科区内で新しいまちづくり活動にチャレンジしたい方を応援する「山科まちづくりチャレンジ応援事業」を、山科区役所が開始しました。この事業では、対象事業の実施に要する費用への補助だけでなく、まちづくりアドバイザーによる随時相談などの伴走支援も受けることができます。

山科 まちチャレ
山科まちづくりチャレンジ応援事業

◆　ＮＨＫ番組「ブラタモリ」

令和５年５月２０日に京都と東日本をつなぐ要衝として、ＮＨＫの人気番組「ブラタモリ」で山科が特集され、旧東海道の「車石」や山科本願寺跡史跡公園、旧東海道線線路下トンネル跡などが紹介されました。また、令和６年１１月に、８ヶ月ぶりに「ブラタモリ」が復活し、「東海道“五十七次”の旅」が三夜連続で放送されました。シリーズの第一夜として、「京都・三条大橋から伏見へ」が放送され、東海道の分岐点である「髭茶屋追分（ひげちゃやおいわけ）」などが紹介されました。

◆　山科区公式 LINE

平成２９年度から令和６年度まで運用していた山科区公式アプリ「やましなプラス+」に代わり、令和７年４月から山科区公式 LINE がスタートしました。暮らしの情報や防災情報、子育て情報、市民しんぶん山科区版デジタルブック等のリッチメニューに加え、原則毎月、月末に LINE 通信を配信しています。

◆　やましな道晴餅

道晴餅は、江戸時代の街道沿いの名所旧跡や特産品などを紹介する「東海道名所図会」に、「道晴茶屋といふ餅の名物あり」と紹介されており、江戸時代末まで東海道沿いの四ノ宮辺りの茶屋で販売されていたとされています。令和７年春に、百数十年時を超え、「やましな道晴餅復活プロジェクト」の手によって復活しました。レシピが残っていないため、見開きの絵を手がかりに、郷土史家や地元の和菓子店などの協力の下で意見を出し合い、米粉で作った生地に西京みそと黒砂糖で作ったタレをつけて、串焼きにする現代版「やましな道晴餅」ができ上りました。現在、区内の一部店舗で販売されており、ＮＨＫの「ええトコ」でも紹介されました。

◆　山科発見！はぐくみかるた

山科区「はぐくみ」ネットワーク実行委員会が令和２年度から準備を進めてきた「山科発見！はぐくみかるた」が、令和８年１月に完成しました。山科区の幼稚園・保育園・小・中学校、児童館等で無償配布されています。令和８年４月～８月には、山科図書館で読み札と取り札及び説明文の展示も行われました。子どもたちの遊ぶツールとしてだけでなく、地域学習の教材や地域交流イベント等で、幅広く活用されています。

◆　山科区誕生５０周年記念事業実行委員会

令和８年１０月、山科区は東山区から分区した日（昭和５１年１０月１日）から５０周年を迎えます。この記念すべき節目の年をお祝いし、山科の歴史や風土、魅力を幅広い世代、とりわけ山科の未来を担う子どもたちにつなぎたい、そのような思いから、地域の各種団体や事業者等の皆様が結集し、「山科区誕生５０周年記念事業実行委員会」が発足されました。

◆　山科区誕生５０周年記念事業

山科区誕生５０周年記念事業実行委員会の主催事業として、「山科区誕生５０周年記念誌」「山科区誕生５０周年記念式典」「山科区誕生５０周年記念大運動会」「集まれ！やましなっ子『やましなパーク』」が実施されます。また、共催事業として「山科区誕生５０周年記念祝賀会　～明日の山科を考える～」「クイズ de たのしく　健康ウォーキング」「ふれあい”やましな”２０２６区民まつり・山科区防災フェア・やましな健康フェスタ」「山科発見！はぐくみリアルかるためぐり」が実施されます。

そのほか、山科区誕生５０周年を多くの区民の皆様と一緒に盛り上げていくため、区民や団体の皆様が実施される様々な取組に「山科区誕生５０周年記念」の冠をつけていただき、冠事業として一緒に山科区誕生５０周年を盛り上げていきます。

また、山科消防団や山科区体育振興会連合会も、令和８年度に発足５０周年を迎えます。さらに、山科義士まつりについても今年は記念すべき第５０回目の開催となります。

◆　「山科区誕生５０周年記念」ロゴマーク

山科区が令和８年１０月１日に誕生５０周年を迎えるに当たり、周年の祝賀機運を高めることを目的に「山科区誕生５０周年記念」ロゴマークの募集及び投票を実施し、右のデザインに決定しました。

このデザインは、「５０」という数字を、区民に親しまれる緑の山々と青い川の流れをイメージしたやわらかな曲線で表現し、その中に山科の美しい四季を巡らせています。

また、３０周年の際に制作されたシンボルマーク（P１参照）の色を取り入れることで、山科区が紡いできた歴史との調和と、未来への一体感を表現したデザインとなっています。

山科区誕生

「山科区誕生５０周年記念」ロゴマーク

◆　山科区誕生５０周年記念　公式 Instagram

山科区誕生５０周年に対する認知度向上及び地域全体の機運醸成を図るため、令和８年８月に山科区誕生５０周年記念の公式 Instagram を開設しました。公式 Instagram では、山科区誕生５０周年記念事業に関する発信、その他５０周年にまつわるイベントに関する発信、山科のまちや人の魅力に関する発信等を行っています。

◆　山科区まちづくり運営方針

山科区では、令和３年度に策定した「第３期山科区基本計画」が令和７年１２月に終期を迎えたことを受け、令和８年度から令和１２年度までの５年間のまちづくりの方向性と具体化に向けた毎年度の事業を示した「山科区まちづくり運営方針」を策定しました。

地域コミュニティ・自治、子育て・若者、観光・産業、防犯・防災、保健・福祉、交通・都市基盤、まちの環境の７つをまちづくりの方向性とし、地域の様々な主体がつながり、学び合い、支え合い、創り合えるまちづくりを推進していきます。

市民しんぶん山科区版令和７年１２月１５日号～令和８年１１月１５日号も要チェック！！

市民しんぶん
山科区版
デジタルブックは
こちらから

山科区公式
LINE でも
山科の情報をお
届け！

第３章　山科区の「碑（いしぶみ）」

山科区には、1532 年に焼失してしまった山科本願寺をはじめ、目に見える形では残っていない歴史が多くあります。

「碑（いしぶみ）」とは、先人の事跡などを後世に伝えるため石に刻み、建てられたものです。

第３章では、京都市歴史資料館が管理するデータベース「いしぶみデータベース」より、山科区内に建立された「碑」と、それにまつわる歴史を御紹介します。

（注）区内全ての碑を掲載しているわけではありません。
碑文については、「いしぶみデータベース」でご覧ください。

赤穂義士旧跡（安朱堂ノ後町）弘化４年建立

瑞光院はもと上京区堀川頭今宮御旅所下る瑞光院前町に所在し、現在地へは昭和 37 年に移転。江戸時代初期に因幡国若桜藩主（のち讃岐国丸亀藩主）山崎家が一寺を建立、藩祖山崎家盛（1567～1614）の院号瑞光院殿から瑞光院と命名された。明暦３　（1657）年に山崎家が廃絶すると瑞光院もまた廃寺となった。のちに播磨国赤穂藩主浅野内匠頭長矩（1665～1701）の妻が瑞光院二世陽甫宗隣と叔父姪の間柄で、かつこの地が遠祖浅野長政の邸宅地であったことから、浅野家の武運長久祈願寺として再興された。元禄 14（1701）年の松の廊下事件で長矩が切腹したのち、院主宗湫禅師は赤穂藩家老大石良雄と謀りその衣冠を境内に埋めて供養塔を建てた。浪士切腹ののち、その遺髪は境内に埋められ、上に遺髪塚が建てられた。

しかし文政年間に火災に遭い荒廃に帰し、有志により仮殿が建てられ再興された。以上同寺の履歴は田中緑紅『忠臣蔵名所』（1958 年京を語る会刊）に依拠するところが大きい。

この石標は赤穂義士旧跡瑞光院と瑞光院建立以前から旧地瑞光院前町にあったという浅野稲荷を示すものである。

旭山古墳群（北花山旭山町）1981 年建立

旭山古墳は、六条山山頂から南斜面にかけて、径 10 メートル程度の円墳が 20 基余り点在している古墳群である。調査された古墳はいずれも７世紀初頭のもので、横穴式石室から須恵器の杯・壺・甕、土師器の甕や鉄釘、金環、刀子などが出土している。この石標は旭山古墳群を示すものである。

粟田口名号碑（山科区日ノ岡朝田町）享保２年建立

安祥院開基木食養阿（?～1763）は、享保２（1717）年に京都の葬送地や刑場（六墓五三昧）に慰霊のため「南無阿弥陀仏」の名号碑を建立した。この碑はその一で、粟田口の刑場に立てたものであるが、のち遺棄され、昭和８（1933）年の国道改修工事の際に折れた上半部のみが出土し現在地に据え置かれた。昭和 40（1965）年に下半部を補い復元されている。

「木食養阿上人絵伝」（安祥院蔵）には「三条粟田口御仕置所は別而重罪超過の所なればとて、石塔も亦余所に過れて大サ壱丈三尺余」と記す。なお、北面下半部に西光院中興西隠の建碑と記すことは不詳。

大石遺愛梅（山科区安朱堂ノ後町）

瑞光院はもと上京区堀川頭今宮御旅所下る瑞光院前町に所在し、現在地へは昭和 37 年に移転。江戸時代初期に因幡国若桜藩主（のち讃岐国丸亀藩主）山崎家が一寺を建立、藩祖山崎家盛（1567～1614）の院号瑞光院殿から瑞光院と命名された。明暦 3（1657）年に山崎家が廃絶すると瑞光院もまた廃寺となった。のちに播磨国赤穂藩主浅野内匠頭長矩（1665～1701）の妻が瑞光院二世陽甫宗隣と叔父姪の間柄で、かつこの地が遠祖浅野長政の邸宅地であったことから、浅野家の武運長久祈願寺として再興された。元禄 14（1701）年の松の廊下事件で長矩が切腹したのち、院主宗湫禅師は赤穂藩家老大石良雄と謀りその衣冠を境内に埋めて供養塔を建てた。浪士切腹ののち、その遺髪は境内に埋められ、上に遺髪塚が建てられた。しかし文政年間に火災に遭い荒廃に帰し、有志により仮殿が建てられ再興された。

以上同寺の履歴は田中緑紅『忠臣蔵名所』（1958 年京を語る会刊）に依拠するところが大きい。

この碑は大石良雄遺愛の梅を富岡鉄斎夫人春子が育てていたのを、瑞光院へ植え替えたものことを記念するものであろう。

大石良雄遺髪塚碑（西野山桜ノ馬場町）安永４年建立

播磨赤穂藩主浅野家の家老大石良雄（1659～1703）は、江戸城内での刃傷沙汰で領地召し上げとなったため、縁戚で浅野家に仕える進藤源四郎の縁故により、進藤の出身地である山科に居を構えた。この石標は、大石の遺髪を埋めた塚に建て、その隠棲の跡を示すものである。

大宅廃寺跡（大宅奥山田）1987 年建立

昭和 33（1958）年の発掘調査で、講堂・金堂・中門・南門と推定される南北に並ぶ四棟の寺院建物跡が見つかり、大宅廃寺と命名された。この寺は白鳳期に創建され、平安時代に全焼した後、再び小規模な堂舎が建てられたと推定されている。中臣鎌足（614～69）建立の山階精舎（山階寺）や豪族大宅氏の氏寺などにも比定されるが確定されていない。この石標はその寺跡を示すものである。

小野小町化粧井戸（小野御霊町）

この地には、絶世の美人として知られる平安前期の歌人小野小町（生没年未詳）の別荘があったという伝承があり、藪中の井戸水を小町が利用したことに因んで、その水を化粧水と名付けたという。この石標はその井戸を示すものである。

小野寺十内室丹子招魂碑（安朱堂ノ後町）

赤穂浪士のひとり小野寺十内（1643～1703）の妻丹（？～1703）は、夫の切腹後、西方寺（現京都市左京区）に夫の墓を建て、ひそかに江戸泉岳寺から夫の首を掘り起こし西方寺に葬った。そのあと食を断ち自死したと伝える。丹の墓は本圀寺塔頭了覚院に建てられたが、了覚院が廃寺になったあと、富岡鉄斎が墓を引き取ろうとして果たさず、瑞光院にこの招魂碑を妻春子の名で建立したという。

以上同寺の履歴と招魂碑建立の経緯は田中緑紅『忠臣蔵名所』（1958 年京を語る会刊）に依拠するところが大きい。なお、丹は寛政２（1790）年刊『近世畸人伝』にも大きくとりあげられ、貞女の範と賞揚されている。

御日山神宮碑（日ノ岡一切経谷）安永８年建立

日向大神宮は社伝によれば、５世紀末に日向国高千穂の峰から神霊を勧請して創建されたという。江戸時代初めに徳川家康の後援により再興され今に至る。伊勢神宮と同じ神明造の内宮・外宮があり「京の伊勢」といわれて尊崇された。この碑は、その歴史を記した碑である。

花山道路碑（山科区厨子奥花鳥町）1927 年建立

京都大学花山天文台は、昭和４(1929)年 10 月に京都帝国大学理学部附属天文台として宇治郡山科町の花山山頂に設置されたが、それに先立ち同天文台への自動車道路が、十六師団隷下の伏見に駐屯していた工兵第十六大隊により昭和２(1927)年 10 月に開通した。この道路は花山道路とよばれ、幅員３間(約5.4メートル)で、山麓の京津国道沿線蹴上から天文台まで、延長 2000 メートルにわたる。途中の８地点には、トレーミ曲路、オーマー谷、ブルーノ点、コペルニクス転回、ケプラー点、ガリレオ道、ニュートン凹路、ハーシェル道と、天文学者の名が付けられている(『天界』103 号掲載「花山天文台」)。この碑は昭和２年に工兵第十六大隊によって開かれた花山道路を記念するものである。なお、昭和 34(1959)年に開通した東山ドライブウエイでは、蹴上から約１キロメートルの間はこの花山道路と同じ経路を利用している。

義士遺髪復旧碑（安朱堂ノ後町）1913 年建立

この碑は、明治 43 年に京都府師範学校が瑞光院の赤穂義士遺髪塚に桜を寄進し、植樹するとき土中から遺髪が出てきた。これを元のとおり遺髪塚へ戻した経緯を記した碑である。

愚堂国師入定地(北花山河原町)

愚堂東寔(ぐどうとうしょく、1577～1661)は、美濃国(現在の岐阜県)に生まれ、妙心寺聖沢院の庸山景庸(1559～1626)に師事した後、妙心寺住持を三度勤めた臨済宗の高僧。後水尾院(1596～1680)や徳川家光(1604～51)・保科正之・中院通村など多くの公家・武家から帰依され、死去の翌年には国師号を授けられ大円宝鑑国師と追諡されている。また正伝寺(岐阜県八百津町)・中山寺(三重県伊勢市)など、各地に多くの寺院を開いた。近世初頭における臨済宗復興の先駆的人物であったが、万治元(1658)年に華山寺を建立して退隠し、この地で入滅した。この石標は、その愚堂東寔の入滅地を示すものである。

大日寺跡(勧修寺北大日)1976 年建立

この地から、第二次大戦前に緑釉骨壺や土器・瓦などが発見されており、丘陵南斜面の二町四方の地が大日寺寺地であったと推定されている。『今昔物語集』にはこの寺の僧広道の往生伝が記されている。この石標は、平安前・中期、この地にあった大日寺跡地を示すものである。

たたら遺跡(御陵大岩) 1972 年建立

日本古来の方法による製鉄をたたら製鉄という。この遺跡は、比良山系から湖西・湖南地域に分布する製鉄遺跡の一つ、如意ヶ岳南麓遺跡群に含まれる御陵大岩町遺跡である。これらの地域の製鉄は６・７世紀を最盛期とし、鉄鉱石を原料としていたと考えられている。この石標は、たたら製鉄の遺跡を示すものである。

琵琶湖疏水煉瓦工場跡(御陵原西町)1989 年建立

明治 18(1885)年に始められた琵琶湖疏水工事では、あらゆる箇所で煉瓦を使用する予定であった。しかし、当時の京都には大量の煉瓦を製造できる工場がないうえ、品質・経費などの諸事情を考慮した結果、京都府は自営自給することを決め、原料の採取と製品の運搬に便利なこの地を選び、煉瓦工場を新設した。工場は、明治 19(1886)年の 7 月から明治 22 年 10 月末に閉鎖されるまで稼働し、この間に約 1368 万 7000 個の煉瓦を焼き、そのうち約 1073 万 600 個が疏水工事に使用された。この石標は、琵琶湖疏水工事に用いた煉瓦を焼いた工場の跡地を示すものである。

仏光寺旧址（東野百拍子町）

仏光寺は、建暦２（1212）年、流罪を解かれ越前から帰京した親鸞（1173～1262）が、この地に建てた堂舎に始まる。順徳天皇（1197～1242）から「興隆正法寺」という寺号を賜り、当初は興正寺と号した。その後、第七代了源（1295～1335）が東山渋谷の今比叡に移し、寺号を仏光寺に改めた。一説によると山科興正寺を建立したのも了源という。なお、仏光寺が現在地（下京区高倉仏光寺）に移転したのは天正 14（1586）年である。この石標は、仏光寺前身興正寺跡を示すものである。

宮道朝臣列子墓（勧修寺西栗栖野町）1972 年建立

宮道列子（？～907）の墓は、栗栖野丘陵にある中臣十三塚古墳群の一つ。円墳で周囲に空堀がある。列子は、宇多天皇（867～931）女御で、醍醐天皇生母である藤原胤子（876～96）の母。『今昔物語集』によると藤原高藤（838～900）が、南山科に鷹狩りをした際、雨宿りしたのが宇治郡大領宮道弥益（生没年未詳）の家で、その娘列子と出会い二人の間に胤子らが誕生した。列子は天皇の外祖母として手厚く葬られた。この石標は宮道朝臣列子の墓を示すものである。

明治天皇御遺跡（安朱桟敷町）

明治天皇（1852～1912）は、明治元（1868）年９月の東幸、同２年３月の還幸、同 11 年 10 月の還幸の途中、毘沙門堂領地内で東海道沿いのこの地にあった茶店奴茶屋に駐輦した。奴茶屋は、片岡丑兵衛という勇猛な弓の達人が、街道に出没した盗賊を討ち取り、文安４（1447）年、茶店を建てて旅人を送迎したことにはじまると伝える。以後、茶店、宿場、本陣として利用された。この石標は、明治天皇が立ち寄った奴茶屋を示すものである。なお、奴茶屋は、平成６（1994）年に山科駅前再開発に伴い建物を取り壊し移転した。

山階寺跡（御陵大津畑町）2008 年建立

この石標は、藤原鎌足によって創建された山階寺の地を示すものである。山階寺については、石標の横に設置された解説パネルに最新の研究成果が記されているのでこれに譲る。

【解説パネル】

山階寺は七世紀後半、藤原鎌足により創建された寺院。中大兄皇子（天智天皇）と共に大化改新を成し遂げた鎌足の「山階陶原家付属の持仏堂」が始まりと推定される。

奈良時代の興福寺に関する史料（『興福寺流記』所引「宝字記」）には、「鎌足は改新の成功を祈って、釈迦三尊像・四天王像を造ることを発願した。事が成就した後、山階の地で造像を行った。やがて重病になり、妻の鏡女王の勧めで伽藍を建て仏像を安置した。これが山階寺の始まりである」と記されている。

その所在地は大宅廃寺説や中臣遺跡説もあるが、山科駅西南、御陵大津畑町を中心とした地域にあったとする説が有力である。付近から有力な遺跡は見つかっていないが、この辺りは大槻里と呼ばれ、西隣の陶田里にかけてが陶原であったらしい。鎌足の子の不比等が育った「山科の田辺史大隅らの家」も近くにあった。

山科寺はその後、大和に移り厩坂寺と呼ばれ、更に平城京に移り興福寺となる。このため興福寺は山階寺とも呼ばれた。天智天皇の腹心であり、藤原氏の始祖となる鎌足は、山階と深い関係があったのである。

山科本願寺跡（西野山階町）1977 年

本願寺八世蓮如（1415～99）は、寛正 6（1465）年に大谷の親鸞廟が比叡山の攻撃により破壊されると、各地で布教を行った後、文明 10（1478）年、名主海老名氏から寺地の寄進を受けた山科の地に本願寺を再建して布教の本拠地とした。天文元（1532）年、細川晴元（1514～63）率いる軍勢による攻撃で焼け落ちた。この石標は山科本願寺跡を示すものである。なお、附近には山科本願寺土塁跡が残されている。

山科本願寺土塁跡、山科本願寺土塁跡南西角

（西野阿芸沢町）1972 年建立

本願寺八世蓮如（1415～99）は、文明 10（1478）年山科に本願寺を再建した。寺域は、堂舎が立ち並ぶ御本寺、僧侶や職人・商人の居住する内寺内、外寺内の三つの郭から構成され、周囲には土塁や堀が廻らされていた。この地は内寺内の北西部に当たる。この石標は山科本願寺の土塁跡を示すものである。

◆付録　元山科図書館長による「山科ゆかりの文学シリーズ」

「山科ゆかりの文学シリーズ」は、元山科図書館館長　仁科周博氏に山科区公式アプリ「やましなプラス+」に寄稿していただいていたコラムです。

山科が舞台となって登場する古典文学、小説などの紹介を中心に、平成 30 年９月時点で第８回まで掲載しています。

山科ゆかりの文学シリーズ①
松尾芭蕉と山科ー『野ざらし紀行』の旅ー

「ええっ！あの松尾芭蕉が山科に来てたの？」
「知らなかった！」という方も多いのではないでしょうか。

貞亨２年（1684）の春、松尾芭蕉（1644 年ー1694 年）は、『野ざらし紀行』の旅の途中、山科から小関越（おぜきごえ）を通り大津に向かったといわれています。

このとき芭蕉は、山にすみれが咲いているのを見て、「山路（やまじ）来て 何やらゆかし すみれ草」という『野ざらし紀行』を代表する秀句を詠んでいます。山路で出会ったすみれの可憐な花が旅路の心をひきつけ、芭蕉は詩心を動かされたのでしょう。

ところで、この句は、平安時代の歌人大江匡房（おおえのまさふさ）が詠んだ和歌、「箱根山 薄紫のつぼすみれ ふたしほみしほ たれか染めけん」を下敷きにしているといわれています。そうだとすると、芭蕉が見たすみれの種類は、つぼすみれだったのでしょうか。

大津では、「辛崎（唐崎）の 松は花より 朧（おぼろ）にて」という幻想的な句を残しています。大津から唐崎の名木の松を眺めた情景を詠んだものです。

＊松尾 芭蕉（まつお ばしょう）[1644～1694]
江戸時代前期の俳人。現在の三重県伊賀市出身。

藤堂良忠に仕えて俳諧を学び、京都で北村季吟に師事。のち江戸に下り、深川の芭蕉庵に住み、談林風の俳諧を脱却して、蕉風と呼ばれる芸術性の極めて高い句風を確立。各地を旅して発句や紀行文を残し、旅先の大坂で病没。俳諧（連句）の芸術的完成者であり、後世では俳聖として世界的にも知られる、日本史上最高の俳人の一人である。

＊「野ざらし紀行」
芭蕉の最初の紀行文。貞亨元年（1683）8 月から翌年 4 月まで、江戸から東海・近畿などを旅し、折々の旅情をまとめたもの。

山科ゆかりの文学シリーズ②
仮名手本忠臣蔵「山科閑居の段」

『時は元禄(げんろく)15年、師走半ばの14日、江戸の夜風を震わせて、響くは山鹿流（やまがりゅう）の陣太鼓…』

この名調子を聞けば、年末の風物詩『忠臣蔵』の赤穂浪士討入りの名場面が目に浮かびます。

歌舞伎や文楽で演じられ不朽の名作とされる『仮名手本忠臣蔵（かなでほんちゅうしんぐら)』全十一段の中から、「山科閑居の段」をご紹介いたしましょう。

＊＊＊　山科閑居の段　＊＊＊

大石内蔵助は息子の主税（ちから）とともに、主君・浅野内匠頭の無念を晴らそうと、ひそかに山科の閑居で、吉良上野介邸討入の準備をしていた。

主税は小浪（こなみ）といいなずけであったが、浅野家がお取り潰しになったことから、二人の間はすっかり疎遠（そえん）になっていた。主税と添い遂げられないことを悲しむ娘を見て、母の戸無瀬（となせ）は、この上は、改めて、娘・小浪を主税の嫁にしてもらおうと、供も連れずに母娘ふたりで、内蔵助たちのいる山科へと向った。

内蔵助と主税は不在。内蔵助の妻・お石は、結婚の申し出を拒絶する。というのも、かつて殿中松の廊下で浅野内匠頭が吉良上野介に切つけたとき、小浪の父の本蔵（ほんぞう）がこれを制止し、とどめを刺すことができなかったからである。内蔵助たちは本蔵を恨みに思っていた。

「本蔵の首と引き換えなら結婚を許す」というお石の言葉に、娘の幸せを叶えたい本蔵は、自ら主税の槍（やり）に突かれて死ぬ。息絶える間際に、本蔵は婿（むこ）への引出物として、吉良邸の絵図面を内蔵助に手渡す。この絵図面により討ち入りを果たすのである。

「山科閑居の段」は、忠臣蔵の中でもたいへん重要な場面で、歌舞伎で演じるのは一座の最高位の女形、文楽では最高位の太夫（たゆう）でなくては語ることができないとされています。

お芝居では、登場人物は、大石内蔵助を「大星由良之助（おおほしゆらのすけ)」、吉良上野介（きらこうずけのすけ）を「高師直（こうのものなお)」とするなど、実名は他の名前に置き換えられています。

大石内蔵助（おおいしくらのすけ）閑居（かんきょ）の地・山科では、毎年12月14日、討ち入りの日にちなみ「山科義士まつり」が盛大に行われます。

この日、義士行列と並んで見逃せないのが「山科こども歌舞伎」（※）です。子どもたちの演じる忠臣蔵は、かわいらしく、しかし豊富な稽古に裏打ちされた名演技は感動ものです。

【仮名手本忠臣蔵】
元禄時代に起こった赤穂浪士 47 人による仇討ちを劇化したもの。寛永元年（1748年）人形浄瑠璃（じょうるり）芝居の竹本座で初演。47人をイロハ仮名47文字にたとえ、武士の「手本」とした題名。

※山科こども歌舞伎：現在は活動を休止しています。

山科ゆかりの文学シリーズ③
「深堀り京都さんぽ」

通も唸（うな）る穴場満載のコミック･エッセイ、グレゴリ青山さんの『深掘り京都さんぽ』（京都ガイド本大賞・リピーター賞受賞）から、“知られざる山科”を紹介いたしましょう。

グレゴリ青山さんは、1966 年京都市生まれ・亀岡市在住。自身の旅やまち歩きの体験をコミック・エッセイで描いている漫画家・イラストレーターで、『京都「トカイナカ」暮らし』『薄幸日和』『ねうちもん京都』など、京都にまつわる作品も数多く執筆されています。

今回、グレゴリさんは、古くからの友人で山科出身の「梅ちゃん」の「いっぺん来て！いいとこやし」の言葉に誘われて、梅ちゃんのガイドで山科を歩くことに。「深掘り京都さんぽ」の中でその様子が紹介されています。山科の方ならピンとくる地元スポットが数多く紹介されていますよ！

＊ 深掘り京都さんぽ～知られざる山科編～＊

グレゴリさんと梅ちゃんが最初に訪れたのは、地下鉄東西線「御陵」駅から北へ徒歩 10 分の旧鶴巻邸。ふだん公開されていないのであまり知られていないのですが、知る人ぞ知る近代日本を代表する名建築です。グレゴリさん、さすが目のつけどころが違います。

旧鶴巻邸から疏水沿いの遊歩道を歩き、美しい紅葉にグレゴリさん「おおおッめっちゃキレイ」と大感激。毘沙門さんでも「すごい“秋の京都紅葉ツアー”のパンフレットの表紙を飾るような景色や」と“知られざる山科”にすっかり魅了されてしまいます。

この後、かなりディープな山科に出会います。

地下鉄東西線に乗って「東野」駅へ。ここから北西へ10分ほど歩くと西野の住宅街の中に謎に包まれた石積みの巨大なオブジェのようなものが。「な・・・何これ」・・・さて皆さんは何だかわかりますか？これって、第１回の山科検定の問題にも出てましたよね。

最後は、梅ちゃんの言う「山科人の大切な場所」、

山科団地の「たこ公園」！
突如現れた巨大なタコの滑り台に、グレゴリさんと梅ちゃんは童心にかえって大はしゃぎしてしまうのです。
＊＊＊＊＊

グレゴリさんの“知られざる山科”、いかがでしたか？この本、さらりと見所を紹介しているようでいて実はなかなか奥が深いのです。旧鶴巻邸をはじめ、もてなすくんや毘沙門堂の動く襖絵、国史跡指定の山科本願寺跡（さっきの答えわかりました？）、そして、山科っ子なら誰もが知ってる「たこ公園」など、“山科の大切なもの”がしっかりと押さえられています。

でも、山科にはまだまだたくさんの“宝もの”がありますよね。今度、グレゴリさんが山科に来る機会があったら、みんなで山科の素敵なところをたくさん紹介してあげましょう。

山科ゆかりの文学シリーズ④
「小野小町の七変化（へんげ）」

平安時代前期の代表的歌人で「六歌仙」の一人、“絶世の美女”として知られる小野小町。小町が多くの男性と交わした恋の歌から、宮中での華やかな生活がしのばれます。しかし、謡曲（ようきょく・能の台本）などでは、全盛期とは一転し、老いて落魄（らくはく・落ちぶれた様）した晩年の小町の姿が描かれています。

「花の色は　うつりにけりな　いたづらに　わが身世にふる　ながめせしまに」
【『百人一首』・『古今和歌集』】

歌意：桜の花の色は、むなしく衰え色あせてしまった、春の長雨が降っている間に。ちょうど私の美貌（びぼう）が衰えたように、恋や世間のもろもろのことに思い悩んでいるうちに。

容姿の移ろいとともに様々に変化していく境遇を、小町はこのような歌で表しています。

時代は下って元禄３年(1690)、大津の地で、松尾芭蕉は「名月や海にむかへば七小町」という句を詠んでいます。
琵琶湖の水面を眺め、小野小町が絶世の美女から老衰へ七変化する様を描いた謡曲「七小町」をふまえて、時間とともに推移する湖水の妖艶（ようえん）さを吟（ぎん）じたものです。

「七小町」のうち、『通小町』で語られる「深草少将の百夜（ももよ）通い」は、山科・小野の地に伝えられています。
小野小町を恋慕う深草少将に、小町は自分のことをあきらめさせようと「百夜訪ねて来てくれたなら、お心に従いましょう」と告げると、少将はそれから小町のもとへと毎晩通うが、最後の夜に力尽きて息絶えます。
男の愛情をもてあそんだ小町の驕慢（きょうまん）な性格が描かれており、このようなイメージが盛者必衰の無常観と結びついて、後世、老いて落魄した小町の説話が生まれたとのではないかと考えられています。

小町は、宮仕えを辞した後、山科の小野で過ごしたと言われおり、山科を代表する門跡寺院の一つである随心院は、「小野小町」ゆかりのお寺としても知られています。
毎年３月の最終日曜日、「はねず踊り」が催され、華やかに着飾った少女たちが梅の小枝を手に持ち、「百夜通い」の童歌に合せて舞い踊ります。

梅の名所としても知られる随心院。小野小町の生涯に思いを馳せながら、訪れてみてはいかがでしょうか。

■七小町
七つの謡曲、『洗草子（あらいそうし）小町』『通（かよい）小町』『卒塔婆（そとば）小町』『鸚鵡（おうむ）小町』『関寺（せきでら）小町』『雨乞小町』『清水小町』をいい、若かりし頃の恋や老いて落魄した逸話、秀でた歌人だったことなどが巧に盛り込まれ、小町の人物像を伝えています。

山科ゆかりの文学シリーズ⑤
宮沢賢治の京都修学旅行と“山科のたけのこ”

「銀河鉄道の夜」や「雨ニモマケズ」などの作品で知られる、詩人で童話作家の宮沢賢治（みやざわけんじ）。本格的に詩や童話を書く前の少年期から青年期にかけて、数多くの短歌を詠（よ）んでいます。賢治の学生時代の京都修学旅行と、そのときに詠んだ“山科のたけのこ”の短歌を紹介します。

大正５年（1916）３月、盛岡高等農林学校農学科２
年の宮沢賢治は、修学旅行で京都を訪れます。修学旅行の主な目的は、関東・関西方面の農事試験場・農学校を見学することでしたが、京都では観光も楽しみました。賢治の同級生の修学旅行日報によると、一行は ３月 23 日から 27 日まで京都方面に滞在、 26 日の日報には、山科について次のような記述が見られます。

「宿から京津電車で大津へ向かう。山科辺を過ぐ。大石良雄に有名たり名所旧跡多し追分過ぎて大津に着く。滋賀県立農事試験場参観。三井寺、石山寺参拝。京都へ向かう。帰りは二途に分かれた。我々は電車で大津へそれから和船で疏水を下った。疏水の三つのトンネルは明治 15 年頃の工事としては大事業であったと思われた。有名なるインクライン・南禅寺を見て宿に帰った」

賢治はこの修学旅行で、“山科のたけのこ”の歌を詠みましたが、大津から船で疏水を下って山科を訪れたのかもしれません。

「山しなの　たけのこばたの　うすれ日に　そらわらひする商人のむれ」

「たけのこばた」は、たけのこの畑で、肥土をふっくりと盛って栽培されています。山科盆地にはそのたけのこ畑がとくに多かったのです。

早春のたけのこ畑は明るく、林立する竹幹の葉を通して漏れる「うすれ日」のやわらかな光の底に、「はしり相場」の一もうけに胸打ち震わせる商人の群れを、賢治は見たのです。

当時、“山科のたけのこ”は全国ブランドの高級品でした。旧追分宿の奈良街道と旧東海道の分岐点には、明治 40 年、山科藤尾筍（たけのこ）組合がその功績を称えて建立した頌徳（しょうとく、徳をたたえる）碑が立っています。碑の東側が筍の入札場（集荷場）でした。東北の農民生活の向上に力をつくした賢治は、たけのこの栽培とその商品価値に対して強い関心があったのかもしれません。

大正時代、あの宮沢賢治が“山科のたけのこ“に興味をもち、この地を訪れていたかも知れないと思うと、とてもロマンティックな気分になります。

■宮沢賢治（1896-1933）
明治 29 年、岩手県花巻生れ。1921（大正 10）年から５年間、花巻農学校教諭。仏教（法華経）信仰と農民生活に根ざした創作を行い、農業技術指導、レコードコンサートの開催など、農民の生活向上をめざし粉骨砕身するが、理想かなわぬまま過労で肺結核が悪化、最後の５年は病床で、作品の創作や改稿を行った。

山科ゆかりの文学シリーズ⑥
五木寛之『冬のひまわり』

この小説のヒロイン・ 遠野 麻子 は、山科の本願寺別院近くの古い宿屋「加賀屋」の娘。

物語は、恋と人生に深い悩みをかかえる麻子が、親鸞ゆかりの日野・法界寺の阿弥陀堂の中で祈るところから始まります。誠実で信心深い夫・良介とともに加賀屋で穏やかに暮らしていた麻子には、東京でデザイン会社を経営する 森谷 透 というずっと想い続ける人がいました。

麻子と森谷が初めて出会ったのは鈴鹿サーキット。麻子 16 歳、森谷 20 歳の夏のことでした。

その日の出来事がいつまでも忘れられない二人は、鈴鹿でオートバイの耐久レースが開かれる真夏の一日だけ、思い出の場所であるメインスタンドの海の見える一角で、逢瀬を重ねてきました。

夫の良介は、二人の関係を知りながら、麻子を愛し、大切に見守っています。

森谷に出会ってから 20 年の歳月が流れた夏の日、また鈴鹿で耐久レースがやって来ました。良介の子を身ごもっていた麻子は、「これからもずっと森谷を愛し続けるのか、それともきっぱりと関係を絶って夫のもとに帰るのか」を決心しようとします。

その日、森谷は鈴鹿のメインスタンドのいつもの場所で麻子を待ちましたが、麻子は反対側のパドック席で彼を見守っていました。

「８時間のこの耐久レースが終わるまで、彼がその場所を動かず立ち続けていたならば、わたしは森谷のところへ走っていこう。靴をぬぎすてて、サングラスもほうり出して、一直線にあの人にぶつかってゆく。会いたかった、と言おう。さびしかった、と言おう。そして、うれしい！と大声で叫んでしまおう。だが、しかし。レースが終了する前、あのチェッカーフラッグが振られる前に彼の姿があの場所から消えたなら、それは彼がわたしたちの約束の場所を見捨てたことになる。もし、そうなったら私は山科へ帰ろう」…麻子は、心にそう誓います。

真夏の炎天下、麻子を待ち続ける森谷。

しかし、レースが終わるまでに力尽きて倒れ、麻子の視界から消えてしまいます。

（帰らなくては・・・）

物語の最後、麻子は「ながいあいだ、ごめんなさい。わたし、もうどこにもいきません」と心に誓い、夫・良介のもとに帰ってゆきます。

物語は、静かな山科と熱気あふれる夏の鈴鹿サーキットを行き来します。それはまるで、古風で控えめ目だが、夏が来るたびに森谷への想いに烈しくゆれる麻子の心と対をなしているようです。

小説では、山科駅前の雑踏、音羽山の麓（ふもと）の山里の様子、蓮如聖人の墓所にかつて池があったことなど、山科の風景も丹念に描かれています。

このコラムを執筆するに当たって、小説の舞台となった加賀屋を探すため、山科のまちを何度も歩き、古い地図も調べてみました。しかし、どうしても見つけることができませんでした。

ただ、本願寺別院界隈には、『冬のひまわり』に描かれた風情ある雰囲気がそっくり残っていて、心ゆくまで小説の世界に浸ることができました。ひょっとすると、仏教・浄土思想に関する著作も多い五木氏は、日野で始まり、山科で終える物語を通して、親鸞（日野）と蓮如（山科）をつないでいるのかもしれません。

これほど山科の情景が多く語られている小説は他にないように思えます。きっと五木氏も、山科のまちを何度も歩いたのでしょう。

山科ゆかりの文学シリーズ⑦
6月10日は山科駅の「不如帰（ほととぎす）記念日」

ねんてんさんの愛称で親しまれている俳人の坪内稔典（つぼうちねんてん）氏、彼のエッセイ集『ヒマ道楽』のなかに、小説『不如帰（ほととぎす)』が紹介されています。徳富蘆花（とくとみろか）著『不如帰』は、国民的人気を博した明治期最大のベストセラーで、家族制度の悲劇を扱った小説です。ヒロイン浪子は当時不治の病であった肺結核にかかり、夫、武男が日清戦争へ出征中に離縁されてしまいます。

小説のなかで、悲劇のヒロイン浪子と夫武男の最後の別れとなる舞台は旧国鉄山科。小説のクライマックスシーンです。

『ヒマ道楽』―東海道本線山科駅より―

小説『不如帰』では、肺結核にかかったため浪子が離縁される。当時、肺結核は不治の病、子どもが産めなくなるので家がつぶれる、というのが離縁の理由であった。離婚後、浪子は父に連れられて京都に旅行した。この世の見納めの旅だった。

宇治の萬福寺（まんぷくじ）を見学したあと、人力車で山科駅に来た浪子は、大津に出るために上りの列車に乗って出発を待っていた。その時、下りの列車が入ってきた。入れ違いに浪子の列車が動き出した。止まった列車の窓に頬杖（ほおづえ）をついている洋装の男がいた。

「まッ あなた！」
「おッ 浪さん！」

こは武男なりき。
車は過ぎんとす。狂せるごとく、浪子は窓の外にのび上がりて、手に持てるすみれ色のハンケチを投げつけつ。武男も身を乗り出し、浪子の投げたすみれ色のハンケチを激しく振る。

ねんてんさんは次のように話しています。

「二つの列車がすれ違ったのは明治 28 年 6 月 10 日。毎年、6 月 10 日前後に、私は東海道線の山科駅に行きたくなる。なんと、実際に何度か行った。ホームのベンチで文庫本を広げ、『人間はなぜ死ぬのでしょう！生きたいわ！千年も万年も行きたいわ！』と言った浪子のセリフなどを読んだ。変かなあ、こんな私は。」

ねんてんさんのように、小説の世界で遊ぶってとても素敵なことだと思いませんか。私は６月 10 日を、山科駅の「不如帰記念日」にしてほしいと願っています。

【徳富蘆花：明治元年（1868）～昭和２年（1927）】
熊本県生まれ。明治 31 年（1898）より『不如帰』を「国民新聞」に連載、ベストセラーとなり映画や演劇などで数多く上演された。邸宅は、蘆花恒春園として一般公開されている。

＊旧国鉄山科駅
明治 12 年（1879）開設。駅は地下鉄東西線「小野」駅付近にあったが、東海道本線のルート変更にともなって大正 10 年に現在の場所に移された。

山科ゆかりの文学シリーズ⑧
『今昔物語集』より～勧修寺のロマンス（玉の輿伝説）～

「今ハ昔」と語り出すおなじみの『今昔物語集』。今回は、ロマンの香り高い巻 22 第 7「高藤内大臣語（たかふじないだいじんのこと）」を紹介いたします。高藤は、藤原良門（よしかど）の子で冬嗣（ふゆつぐ）の孫という高貴な生まれの貴公子。高藤が若き日、鷹狩りに出かけた折に、南山科で宇治郡大領（郡司、土地の豪族）の宮道弥益（みやじいやます）の娘・列子（れっし）と、一夜の夢のような契りをかわすところから話が始まります。

今ハ昔。藤原良門の子で冬嗣の孫にあたる高藤という人がいた。15、６歳の頃、南山科に鷹狩りに行ったところ、夕刻になって一転にわかにかき曇り雷雨が激しくなり、高藤は供の馬飼いとともに、西の山沿いの人家に雨宿りに駆け込んだ。

その家は身分の高くない者の家であったが、由緒のありそうな家で、高藤は主人の歓待を受けた。この家の娘は、13、４歳ばかりであったが、極めて美麗で気高く見えた。高藤はこの娘に心ひかれ、秋の長い夜を二人で契り明かした。

翌日、京の家に帰った高藤は、心配した父の良門に鷹狩りを禁じられた。高藤は娘のことが心にかかって恋しく思ったが、家の場所をただ一人知っている馬飼いの男も田舎に帰ってしまったので、なすべき方法もないままに６年の月日が過ぎた。そのころ、馬飼いの男が田舎から上京してきたので、高藤はこの男に案内させて娘のもとに向うと、娘は前よりも一段と女らしさが加わり別人かと見まがうほどに美しくなっている。そして、かたわらに５、６歳くらいの言い様もないほどかわいらしい女の子（胤子・いんし）がいた。かつて高藤が娘と契りをむすんだ際に生まれた子であった。高藤は二人を都へ迎え入れた。

さて、この高藤は大変立派な人物で大納言にまで出世した。姫君の胤子は、宇多天皇の女御になって醍醐天皇を生んだ。また、男子二人のうち兄・定国は右大将、弟・定方は右大臣となった。宮道弥益は四位に叙せられ、修理大夫（しゅうりだいふ）に任じられた。醍醐天皇が即位すると、高藤は大納言からさらに内大臣にまで昇った。

弥益の家は寺にしたが、今の勧修寺がそれである。また、向かいの東の山のほとりに、弥益の妻が堂を建てたが、その名を大宅寺（現在不明）という。この弥益の家のあたりをなつかしく慕わしいものとお思いになったからであろうか、醍醐天皇の陵は、その家の近くにある。

かりそめの鷹狩りの雨宿りがきっかけでこのようなめでたいことになったのだが、これは（偶然の出来事ではなく）みな前世からの因縁であったのだ、トナム語り伝ヘタルトヤ。

勧修寺は宮道弥益の家跡を寺としたもので、醍醐天皇生母の胤子は 21 歳の若さで死去し、その追悼のため醍醐天皇により建立されたといわれています。

藤原高藤の子孫の一門は、朝廷の要職を担う者を多く輩出し、宮廷社会で活躍しました。そして、この一門は、勧修寺を精神的な拠所（よりどころ）として結束したので、勧修寺流藤原氏とよばれています。

【今昔物語集】
平安時代後期の日本最大の説話集。作者未詳。全 31 巻。「今ハ昔」の冒頭句、「トナム語り伝ヘタルニヤ」の末尾句で語られる。全体は、天竺（インド）、震旦（中国）、本朝仏法、本朝世俗の４部に大別して千余編を収める。仏教史、霊験譚（たん）、因果応報譚が多い。また世俗界の話柄も豊富。俗語を交えた自由な和漢混淆（わかんこんこう）文で書かれ、僧、武士、農民、医師、遊女、盗賊、乞食から鳥、獣、妖怪変化までに及んでいる。

公式テキスト時点修正事項

公式テキストページ数	項目	正誤表	
		誤	正
7	④ 母子地蔵	疏水の完成から９年後の	疏水の完成から 13 年後の
12	⑳ 京都お箸の文化資料館		閉館した。
14	おもしろ 街道に敷かれた車石	敷設する前に刻んだものか、車の往来によって削られたものかについては、諸説があります。	車の往来によって削られたもと言われています。
22	イラスト	至 奥醍醐	至 上醍醐
25 56	⑥④ 大宅一里塚 区民誇りの木（Ｅ０６）エノキ		植えられていたエノキの木は、平成 28 年９月に倒木した。
29	おもしろ 東野にあった「桐材問屋」		現在は、写真の看板については取り除かれている。
32 45	⑦⑨ 清水焼団地 山科区の年間行事一覧表		「陶器まつり」及び「楽陶祭」は、統合され、10 月第３金・土・日曜日に「清水焼の郷まつり」と名前を変えて開催されていたが、令和８年に第50回という節目を迎えるにあたり、「KYOPO(Kyoto Pottery Expo)」という名称へリニューアルされた。
33	⑧① 砥粉工場		現在では「砥之粉」という記載がよく用いられている。
36	⑨② 上村堤防（水堤防）	大正後期	明治の後半
39 54	⑨⑧ 山科本願寺南殿跡 山科の指定・登録文化財		山科本願寺跡の中心部分である御本寺部分から石風呂を伴う建物跡等が確認されたことにより、平成 27 年 12 月「山科本願寺跡及び南殿跡」として国史跡の追加指定が行われた。
39	イラスト	蓮如上人御指図井戸	蓮如上人御指図井
45	山科区の年間行事一覧表 わらじ市 三条街道わくわくフェスティバル		現在は、時期及び名称を変えて開催されている。

46	⑩9 愛宕常夜灯			醍醐街道（東野百拍子町）の常夜灯は現在撤去されている。
50	山科の出来事（学区別一覧）	近代（明治）／安朱	1901 母子地蔵堂建立	1903 母子地蔵堂建立
		近代（明治）／共通	1876 戊申戦争	1876 戊辰戦争
51		近世（江戸）／百々	1700 大石良雄、山科閑居	1701 大石良雄、山科閑居
55	山科区の埋蔵文化財包蔵地一覧			新たに、「大塚・小山石切丁場跡」が追加された。
56	区民誇りの木（ B04 ）クロマツ			現在は存在しない。